

準備に加え、トイレトレーラーが必要だと感じます。全国展開を期待。

- ・きれいで清潔なトイレに慣れてしまっている現代ではトイレの問題を考えることはとても大事だと思う。自分の市でも展開されるといいと思う。市と民間で考えていけないものなのか？
- ・避けて通れない「トイレ」の問題について実例を示してとても分かりやすかった。災害派遣トイレプロジェクトは素晴らしいシステムだと思う。地元でも広がって欲しい。

☆ 3 時限目

「アレルギーっ子の災害対策」

～東日本大震災・熊本地震における支援活動の教訓から学ぶ～

中西里映子氏（アレルギー支援ネットワーク常務理事）



- ・しっかり食品表示を見たり聞くことが大事。避難所には特別な品を受け取る受付も必要だと思った。
- ・要配慮者というどうしても障がい者に特化してしまう。多様性も含めアレルギーも常に考え、特殊なものではなく多くの人に対応したい。
- ・まわりにアレルギーの人がいないので知識がなかった。勉強になった。エピペンを初めて見て触った。
- ・今回の研修の中で一番知りたかったテーマであり、実際の話も各県の連携体制、災害時の支

援内容など勉強になることばかりだった。アレルギーに特化したレクチャーを受けたことが無く一つひとつが貴重な話だった。

- ・アレルギー対応について学ぶことができ、避難所マニュアルに反映する必要を実感した。豊橋のアレルギー対応カレーは訓練で取り入れたいと思う。
- ・炊出しの時の見直しをしていきたい。皆さんに伝える。赤十字、社協へつなげていきます。頑張ります。
- ・避難所は貼紙、メディアを通じてアレルギーお困り PR 等も必要だと知った。

☆ 4 時限目

「防災・減災リーダーとして今後の活動を考える」

小村隆史氏（常葉大学社会環境学部准教授）



- ・2030年～2035年を見据えて今後の活動を考えた時、災害VCの会員として今回学習した多様な面でのつながりを考え取り組んでいきたいと思った。
- ・知識を身に付けるだけでなく、実践し行動する。
- ・地域の防災にも女性のリーダーをと思い勉強していますが、中々地域の中では難しい。意見を言っても流されてしまい取り入れてもらえないのが現状だと思う。一人でも多くの人が講座を勉強して欲しいとつくづく思う。
- ・知識を知恵に変える。自考・自動でマイペー

スで進めていくことが重要。どのように実践に移すかを考えて一歩進みます。

・リーダーとして何が出来るか？自分、家族、地域、主戦場はどこなのか？思ったり考えたりすることは誰でもできる。行動を起さねばと痛感した。

★避難者として参加して下さった障がい者の家族から感想をいただきました！

・このような避難所訓練をして啓発をしてきていることに力づけられますし、自分の地域では何が出来るのか、まず自分は何をするのか、答えはわかっているのに動き出せない自分を反省させられました。

子供についての感想は、娘は指示に従って動くことはできますが、落ち着いた雰囲気の中での訓練だったのでそれができたのだと思います。

昨年、施設での防災訓練後、少々精神的にパニックに近い後遺症症状が見受けられましたが、今回は親もいたので出ませんでした。

本番だったときの後遺症がどれほどのものなのか想像つきません。指示を理解して行動できたり、普段パニックは起こさない子ほど、パニックを起こしたら親も周りも対応に困ることになるかもしれません。震災後本当に安心できる環境はやはり自宅以外にないのかと考えさせられました。

・浜岡原発にほど近い地域の方々だったので避難所設営への関心が高いようでした。「浜松は企業が防潮堤にお金出してくれて工事が進んでいていいね」と言われました。

しかし、津波被害は減少しても、避難所生活は想定内のはず。実際、どこかの地域でモデル的にでも避難所設営の訓練が必要だと思いました。

避難所→福祉避難室→福祉避難所と、まずは障がい者がその場にいないければ設営されないし、自宅避難では、支援物資すら受け取れないだろうし不安が募ります。

娘は少し不安になり、部屋から出てしまいましたが、ボランティアさんと腕を組んで一通り回ることはできました。

段ボールベッド、テント、トイレなどは一切入れませんでした。(学校の防災の授業でも、テントの中に入ってけません) 試食も食べました。(お腹がすいていたせいだと思います。スーパの試食は大好きなので)

初めての場所や大勢の人がいる中に入るのが苦手です。よくがんばったほうです。

帰宅後は、お土産の非常食を一つひとつ確認しながら、自分のリュックだと認識し、どこに置いておこうかと兄と話していました。ちょうど学校の防災の授業と重なったので、本人はなんとなく理解できたようです。

地域に、避難所に障がい者はいない＝行けないではなく、当たり前にいるものだと思ってもらえるように、ひきこもってはいけいかなあ実感しました。

・最初はよくわからないままに館内に入り、お昼のお弁当もおいしくいただきましたが、玄関前で受付が始まって、カードの読み取りが始まったころから顔がこわばり始めました。

受付のあと二階に上がって最初の部屋で順番に並び「何か困ったこととか頼みたいことはありますか？」と聞かれた時には生唾を飲み込むような様子が見られ、次の部屋では、並んでいる時にもう嘔吐するような気配が見えました。

並ぶのを中断して少し嘔吐しながら1階に降りたらもう限界でした。「車に行きたい」という仕草があったので車に戻りました。

安心したのか、その後はおとなしく車にいたので、親だけ会館に戻り、テントや段ボールのベッドやベンチを体験しました。

今日は大勢の人はいたけれど雰囲気は落ち着いていたし、みんな笑顔で応対してくれているにもかかわらずこの様子では、実際の避難所にはいられないことは簡単に想像がつかます。

シートで囲まれたトイレも、たぶん絶対に使

えないだろうと思いました。可能な限り家で避難する覚悟をもって準備しようと思ったことと、避難所で過ごせない家族が中長期的に日を送るために必要なことは何か、整理しなくてはと改めて考えさせられました。

今後また機会があったら参加したいと思ったことと、今回このような訓練の場を体験させていただいたことに心から感謝いたします。手作りの心温まるお土産もありがとうございました。

・ろうあ者にとって最初の受付すら理解できない。ろうあ者だと分かたら大きな名札などに手話が必要だと書いて持ち歩きたい。今日は手話通訳がいてボランティアさんがホワイトボードで会話をしてくれたので少しは気持ちが落ち着いていた。このような訓練は本当は地域でやって欲しいと感じた。

＊障がい者の皆様には勇気をもって避難者としてご参加いただいたことに、受講生共々主催者側として感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

あって欲しくない大災害は都司先生の話や科学的根拠に基づき残念ながら起こることが分かっています。より良い避難所を目指すのではなく、避難所に行かなくても良いように自助努力をし、家族や地域の人との共助協働を目指すことが大事だと感じております。

この講座が「敵を知る」「命を守る」そして「生き延びる」「復旧・復興」の一助となれば望外の喜びです。

受講者の皆様からのご意見、ご要望、暖かい励ましの言葉など今後の活動に活かしていきたいと存じます。来年も9月29日（土）及び30日（日）に開催を予定致します。防災・減災に興味のない方と一緒に参加していただけることを願っております。

★特別認定者

＊魁（さきがけ）女性リーダー認定者

・松村 友紀子様

・伊達 政子様

＊ゴールドリーダー認定者

・清水 健一様

◇魁とゴールド認定者はこの養成講座に5年連続で参加し、様々な講座や訓練を経験し、知識の向上に努力されたことを評し認定しました。

特に女性のための防災・減災に関する講座は県内でも初めて開催し、積極的に他の女性に先駆けて受講したことに敬意を表するものです。

7. 事業の成果

受講者は各専門分野の講師の講義を受講して専門知識の習得することができた。また、障がい者の避難所受入の訓練において、受講者が災害時の障がい者への気配り、心配りなど、男女問わず配慮のあり方を知ることができた。

障がいのある当事者や家族も災害に対して自助努力をすることが重要で、日頃から様々な人との交流が必要不可欠だと理解していただくことができた。

防災講演会においても、歴史的観点から本当に地震が発生することが改めて確認でき、日頃の備えをより加速化して進めていく必要性を受講者に伝えることができた。積極的に防災・減災の場に参画してくれる人材を育成できた。

8. 今後の展望

受講生のアンケートから、女性の立場で避難所の運営をしていくことや、発災前から地域で活動していくことが期待できる。地道ではあるが、この養成講座を続けることにより他の団体、地域等が防災・減災に対する女性向けの講座を企画するなど、静岡県全体が男性中心の防災現場の中、女性も参画しやすい防災現場に変革できる。

